Japan Society of Obstetrics and Gynecology

P3-58　画像診断し得た卵巣成熟嚢胞性奇形腫悪性転化の1例～FDG-PET/CTによる奇形腫の良悪性部分の描出を中心に～

高知大
山田るりこ，小栗啓義，前田長正，深谷孝夫

【緒言】成熟嚢胞性奇形腫（奇形腫）は，1～2%と低率ではあるが悪性転化を認める．しかし，悪性転化した奇形腫の術前診断は困難である．今回，我々は術前に施行したCT，MRI，FDG-PET/CTで良性奇形腫と悪性転化の混在を強く疑い，摘出組織により確認し得た1例を経験したのでその画像上の特徴を報告する.【症例】39歳（主訴）腹部腫瘤触知，発熱.（現病歴）妊娠中に付属器異常は指摘されず，産褥に腹部腫瘤と持続する発熱を認めた．産褥1ヶ月検診で巨大骨盤内腫瘤を指摘されたため，当科紹介となった.（初診時所見）CTで脂肪成分を含む径3cm大の骨盤内腫瘤を指摘された．MRIで，脂肪成分を含む嚢胞部分と造影される充実性部分の混在する腫瘤と診断された．悪性病変を疑い施行したFDG-PET/CTでは脂肪成分を含む嚢胞部分にはFDG集積を認めず，充実性部分にSUV＝28.8におよぶ極めて強いFDG集積を認めた．腫瘍マーカーはCA19-9 497.5 U/ml，CA125 94.0 U/ml，SCC 2.4ng/mlと異常高値を示した.（病理所見）摘出した右卵巣腫瘍は脂肪，毛を含み，重量は6.8kgであった．組織学的に，嚢胞部分は汗管，神経，脂肪，毛包などからなる良性の奇形腫と診断された．連続した充実性部分はsarcomaが主体のmature cystic teratoma with malignant transformationと診断された.【まとめ】奇形腫は，超音波，CT，MRIにより日常よく診断されるが，悪性転化を疑った場合にはFDG-PET/CTは鑑別診断において非常に有用な診断ツールとなることが示唆された．

P3-59　成熟奇形腫の悪性転化について

福井大[1]，福井県済生会病院[2]
澤村陽子[1]，品川明子[1]，黒川哲司[1]，吉田好雄[1]，紙谷尚之[2]，小辻文和[1]

最近経験した悪性転化を伴う成熟奇形腫の1例を報告し，これまで経験した5例について考察する.【症例】55歳　分娩歴なし【現病歴】10年以上前から下腹部の腫瘤を自覚していたが放置．排便後の違和感を主訴に近医受診し，下腹部巨大腫瘍を指摘され当院に紹介となった.【入院時所見】下腹部は膨隆，臍上に及ぶ可動性不良の腫瘤を触知した．内診では，腫瘤による圧迫により外子宮口は見えず，子宮体部は同定困難，骨盤腔を占拠する腫瘤を認め，同部位に圧痛を認めた.【経過】2006年9月27日，開腹術を施行した．腫瘤は右卵巣由来で腫瘍後面はほぼ全面癒着していた．腫瘍の内容は主に脂肪成分で毛髪が混じっており，腫瘍壁には充実性部分もあった．S状結腸への浸潤あり，子宮，両側附属器摘出術およびS状結腸切除術を施行した．その後，化学療法を3コース行った後，腹部CTを行ったところ，肝臓に再発と思われる病変を指摘され，2007年2月1日　肝臓部分切除術を行い，以後は再発なく経過している．著効する化学療法がなく予後不良である本疾患の5例について考察し報告する．

P3-60　卵巣原発の悪性転化を伴う成熟嚢胞性奇形腫4例の臨床的検討

県立広島病院
頼　英美，藤東淳也，木谷由希絵，原　香織，向井百合香，吉本真奈美，伊達健二郎，上田克憲，占部　武，大濱紘三

成熟嚢胞性奇形腫は若年者に好発する良性の卵巣腫瘍であるが，その約1～2%に悪性転化が生じるとされている．今回我々は，悪性転化をきたした成熟嚢胞性奇形腫の4例を経験し，後方視的に検討したので報告する.【症例】(1) 平均年齢は57.3歳（45～72歳），閉経後が3例（75%），主訴は不正性器出血（1例），腰痛（1例），腹部膨満感（1例），無症状（1例）であった．平均腫瘍最大径は9.75cm(5～12cm)，術前の腫瘍マーカーはCA125の上昇を3例(75%)，CA19-9の上昇を1例(25%)，SCCの上昇を2例（50%），CEAの上昇を1例（25%）認めた．CTおよびMRIで全例に悪性転化が術前に推測された.(2) 臨床進行期はIa期，IIc期が各1例，Ic期が2例であった.(3)手術術式は単純子宮全摘＋両側付属器切除＋大網切除(1例)，単純子宮全摘＋両側付属器切除＋リンパ節郭清＋大網切除＋虫垂切除（2例），両側付属器切除（1例）であり，リンパ節転移は認めなかった.(4) 悪性転化の組織型は，扁平上皮癌（3例），癌肉腫（1例）であった.(5) 術後の治療は化学療法（3例），化学療法と放射線療法（1例）が施行され，術後化学療法としてTC療法（3例）を施行し，現在3例（75%）が生存している.【結論】特に閉経後の成熟嚢胞性奇形腫については悪性転化を念頭に置きながら慎重な診断および対応が必要である．今回，CTおよびMRIの画像診断が悪性転化の術前診断に有用であった．術前に悪性転化を疑う場合は，初回手術で卵巣癌の標準術式を行うことが予後の改善につながると考えられた．

NII-Electronic Library Service